

拾ったものは
大切に
しましょう

～子狼に気に入られた男の転移物語～

4

著 ぼん 監 TAPI岡



》》 ヒューゴ

イオリに拾われた奴隷の青年。二十の兄。

》》 ソル

入手した卵から生まれたフェニックスの雛。

》》 イオリ

ゼンを助けたことで異世界に転移した青年。穏やかで礼儀正しいが、料理のことになると暴走しがち。

》》 アウラ

イオリに拾われたバトルホース。高い戦闘能力を持つ。

》》 パティ

イオリに拾われた狼獣人の少女。双子の妹。

》》 スコル

イオリに拾われた狼獣人の少年。双子の兄。

》》 ナギ

イオリに拾われたエルフの少年。特別な力を秘めている。

》》 ニナ

イオリに拾われた奴隷の幼女。ヒューゴの妹。

》》 ゼン

イオリに拾われた狼。転移時に神獣フェニリスになった。体のサイズを自由に調整できる。

登場人物紹介

絶対神リュオンの加護を受け、別の世界に転移した孤独だった青年、相沢庵——イオリ。

真つ白な子狼から神獣フェンリルになった相棒のゼンと共に、イオリは新たな世界での生活を始めることとなった。

“明けぬ魔の森”と呼ばれる魔獣が生息する過酷な森で修業を積み重ねたイオリは、狼獣人の双子のスコルとパティ、エルフのナギ、そしてバトルホースのアウラを家族に迎える。

そして、ポーレットの街での優しい人達との出会いに助けられて生きていた。

冒険者でありながらもその卓越した知識と料理の腕を信頼され、ポーレットの領主テオルドの庇護を受けることとなったイオリは、街を揺るがすスタンピードに遭遇するもそれを早急に解決し、平和な時間を取り戻した。

その後、中古の馬車を手に入れたイオリは、ポーレットの街を出て子供達と共に旅を始めることになる。

最初の目的地は、誕生したばかりでまだ攻略者のいない“天空のダンジョン”である。

天空と名が付きながらも、入り口は廃墟の扉という何とも変わった場所に驚くイオリ達であったが、順調にダンジョンの中を進んでいく。

最終的にたどり着いたのは、大地から遠く離れた青空に浮かぶフロア。それはまさに、天空と呼べる場所だった。

そこで出会ったのが、ダンジョンの主であるドラゴンのスカイヤ。

彼との会話で、イオリは思いがけず、かつてこの世界に存在した“神の愛し子”という存在に触れることとなった。

その後、なぜかスカイヤの戯れで戦いが始まってしまったのだが……それに難なく勝利したイオリ達はスカイヤから真つ赤な卵を授けられる。

その卵から誕生した真紅の小鳥は、フェニックスと呼ばれる癒やしの力を持った聖獣だった。

夕日を意味する言葉からソルレカランテ——通称ソルと名付け、そのフェニックスを家族に迎え入れたイオリ達。

保温と冷蔵の魔道具を求めて、彼らが次に向かうのは魔道具の街“アンティティラ”。

冒険者に襲われるというアクシデントに遭遇しつつも、イオリ達は無事に街までたどり着く。

そこでは、新たな出会いがイオリ達を待っていた。

第1章 初めての旅

～アンティティラ～

1

アンティティラの街の門が近づいてきたためイオリが声をかけると、子ども達は馬車に設営されたテントから飛び出てきた。

「ここ？ 何か山みたい……」

「街、どこ？」

スコルとパティは不思議そうにそう言った。

ナギはニコニコ笑顔で、イオリの肩にソルを乗せた。

「ナギは知っていたんだね？ 教えてあげて」

イオリの言葉に、ナギは目の前の山を指差して説明する。

「あのお山の下に街があるんだよ。地下都市っていうんだって。エルノールさんがそう言ってたよ。ものづくりの得意なドワーフは地下の方が仕事が捗るんだって。それと、太陽の光を街に入れるための鏡が沢山あるんだって」

「鏡？」

スコルとパティの双子は分らないと首を傾げる。

「鏡の反射で地下に光を当ててるんだって。ドワーフが街を造るまでのお話を書いた絵本があつて、それに書いてあつたんだ。ドワーフは短気なところもあるけれど、仕事は手を抜かずに努力するんだって」

「ナギ凄ーい！」

双子は感心したようにナギを褒めた。

ナギは恥ずかしそうにイオリに顔を向けて、モジモジとする。

「双子が料理や解体を頑張っているように、ナギは本を読んで知識を得ることに努力を惜しまないだね。素晴らしいことじゃないか。俺も知らないことだったから、ありがとう」

イオリの言葉を聞いて、ナギは嬉しそうに頷いた。

「準備しよう！」

スコルの指示の下、子ども達はテントを片付け街へ入る準備をする。

イオリは馬車を引くアウラに声をかけて、街へ入るための列に並んだ。

列はどんどん進み、いよいよイオリ達の番になった。

「次！」

ドワーフの門兵の声で、イオリは馬車を進めた。

「身分証は？」

ポーレットとは違い、アンティティラの門兵は必要以上に話す気がなさそうだ。

イオリは冒険者としての情報が記載されているギルドカードを出すと、縛った状態で馬車に乗せている男達の説明をする。

「ダンジョンから出てきたら後ろの男達に襲われたんで、捕まえたんです。どうしたらいいですか？」

ガタイは良いが身長は低いドワーフの門兵はジャンプして馬車を覗くと、イオリを見上げた。

「……あれか？ 報告は来てる。ギルド協会からお前達に関しての連絡があつたんだ。こいつらは預かるう。それにしても、Sランクの冒険者にしては若いな。……ああ、冒険者ギルドは街へ入って最初の広場の左から3つ目の穴を進むとある。馬車は入れないから最初の広場で置いていってくれ。Sランクからは入場料は取らない。子どもも一緒に入って良いぞ」

門兵のドワーフは簡潔に説明すると道を開けてくれた。

イオリ達を襲撃した男達は他の門兵により馬車から降ろされ、引きずられていった。

「そういえば、あの人達の馬は解放してしまいました」

慌ててイオリが報告すると門兵は手をあげて応えた。

門から進むと、山の麓に、大きく、深く掘られている大穴が現れた。

その大穴の底に向かって緩やかな坂を下りていく。

底にたどり着くと、広場と呼べるほど大きな地下空間が広がっていた。

その広場では、多くの人が街へ入る準備をしている。

馬車置き場近くでイオリ達が馬車から降りると、ドワーフの男が近づいてきた。

「馬車を停めるのか？ 銀貨1枚だ」

「イベントリを持ってるのでしまっちゃいます。少しだけ場所を貸してください」

イベントリは本来の容量を超えた物を保管出来る魔道具である。

イオリは、神リュオンからもらった腰バッグ型イベントリを使用している。

「そうか、邪魔にならなさいいぞ。それで馬はどうする？」

「この子は小さくなれるんで一緒に入ります。大丈夫ですよね？」

ドワーフは眉間にシワを寄せる。

イオリがアウラのハーネスを外してアウラが小さくなると、ドワーフは納得したように頷いた。

「珍しいもんを見た。バトルホースか……この大きさならいいぞ。大型の動物を連れ込むのは住人しか許されていないんだ。じゃあ、アンティティラを楽しんでくれ」

ドワーフはそう言うと、すぐに別の旅人に声をかけに行った。

スコルが口を開く。

「ドワーフさんって、全員がカサドさんみたいな人かと思っただけど、大人しいね」

カサドは、ポーレットの街でイオリ達がお世話になっているドワーフの鍛冶師である。

イオリは笑いながら頷く。

「出会ったのはまだ2人だけど、親切だったね。怒ったら怖そうだけど」

「「あははは」」

子ども達も笑い声を上げた。

イオリは肩のソルを撫でて、左から3つ目の大穴に向かった。

「さあ、冒険者ギルドに向かおう」

△ △ △

魔道具の街改め、地下都市アンティティラは、山を掘削して出来た岩肌に沿って建物が作られていた。

街には街灯や店の優しい明かりが広がっている。

カンカンカン！ トントントン！

そして至る所からもものづくりの音がする。

イオリが口を開く。

「凄い綺麗な街だね。ポーレットの街は整然とした美しさがあるけど、アンティティラには不揃い

なものが纏まとまった綺麗さがあるね」

イオリから離れないように歩く子ども達は目を煙まきめかせて頷いた。

そんなことを話しながら、イオリ達は冒険者ギルドの紋章がある建物を探して歩く。やがてそれらしき建物を見つけた。

扉を開いて中に入ると、1階は酒場で2階にギルドの受付がある。

イオリ達がギルド内を歩くと、いつもの通り注目が集まる。

階段を上り受付を見渡していると、ひよろつとした男性が近づいてきた。

「はいはいはい。ご用ですか？ 初めての方ですよね？ 私はアンティティラの冒険者ギルドでサブマスターをしておりますデュークと申します」

冒険者ギルドでは珍しいタイプタイプの男性だ。

イオリはデュークに返事をする。

「初めまして。イオリと申します。ポーレットから来ました。ギルド協会から連絡が行っていると思うのですが、こちらのギルマスにお会い出来ますか？」

デュークは熟知り顔で頷いた。

「はいはいはい。伺っております。ご無事にご到着出来たようで良かったです。それとダンジョン攻略おめでとうございます。Sランク冒険者にお越しいただけるなんて光栄ですよ。パーティーの皆様もお疲れ様でした。さあさあさあ、ギルマスの部屋にご案内しましょう。首を長くして待つ

ていましたよ」

イオリ達はデュークのとに続き、受付脇にあるギルマスの部屋に入った。

「ヨルマ！ 入りますよ！ 待ち人がいらっしやいましたよ」

ノックもせずにデュークは扉を開けた。

中にいた男性が声を上げる。

「おお！ 来たか！ 入れ入れ。思ったより早かったな」

その男性を見た瞬間、双子が叫んだ。

「モジャァー！」

双子の言葉に男性が反応する。

「誰がモジャだ！ 次言ったら、ハンマーで潰すぞ！」

イオリ達の目の前の大柄なドワーフは、確かに髪も髭ひげもモジャモジャだ。

「スママセン。スコル、パティ。初めましてもしてないのに、モジャ呼びは駄目だよ……」

イオリは双子を窘たしなめた。

「たとえモジャモジャの髪と髭ひげだったとしても、モジャなんて言っではいけません。まずはご挨拶あいさつをして自己紹介、そのあとにモジャと呼んで良いか聞きなさい」

「はーこ」

イオリの言葉に双子は元氣良く返事をした。

大柄なドワーフがツツコむ。

「いや、お前、何ていう教育してるんだよ。モジャと呼ぶこと自体を叱れ。本当にコジモから聞いてた通り変わった奴だ。俺がアンティティラの冒険者ギルドのギルドマスター、ヨルマだ。お前はSランク冒険者イオリと、そのパーティーメンバーということではないか？」

ヨルマの隣ではサブマスターであるデュークが腹を抱えて笑っていた。

イオリは照れたように笑い、挨拶をした。

「はい。俺がイオリです。従魔のゼンとアウラ、狼獣人の双子のスコルとパティ、エルフのナギです。そして、ダンジョンで新たに家族になったソルです」

イオリは掌あひらにソルを乗せて紹介した。

「はっ！ 何ておかしなパーティーだ。アンティティラへよく来た。歓迎する！」

「ありがとうございます。早速ですが、こちらでソルの従魔登録をお願い出来ますか？」

イオリの言葉を聞いて、ヨルマは未だに笑っているデュークを蹴った。

「痛った!! くふふふふ。準備が出来てます。ギルドカードをお預かりしますね」

デュークはイオリのギルドカードをテーブルにある魔道具の水晶に当て、ソルの情報の登録をした。

「はいどうぞ。登録終了です。素晴らしい従魔さん達ですね。どうぞ座ってください。お茶でも出しましょう」

「ありがとうございます。みんな、とりあえずこれで安心出来るね」

ゼン達は正式な登録が完了したことに安堵あんぶした様子で、ソルに笑いかけた。

ソルはイオリや子ども達の膝ひざの上をトントンとジャンプして遊び始めた。

「さあ、ここまでの話を聞かせてくれ。面倒事もあつたんだろ？」

ヨルマに尋ねられ、イオリはダンジョン攻略からここに来るまでの話をした。

「……天空の守護者スカイヤカ。伝説のドラゴンだな。ああ、お前さんが嘘をついてるとは思わん。何せギルドカードにダンジョン攻略の証拠が残っているしな。とはいえ、ドラゴンは知能が高く、本来人間など相手にせん。本能で生きているワイバーンは別だがな。それに、フェニックスを従魔にするとはな。ギルド協会の職員が危惧するだけはある。先んじて連絡をしてくれた職員はデキる奴だな」

「はい。職員さんには感謝しています。それと、襲ってきた冒険者達は門兵さんへ預けました」

イオリの説明を聞いたデュークは頷いて、部屋を出ていった。

「門兵からの取調べのあとはギルドが調べる。ご苦労さんだった。アンティティラでの宿は決まってるのか？」

「いえ。真っ先にギルドに来たので」

「それなら、ギルドの宿あも空あいてるぞ？ 観光者用ではないから簡素だが、広い部屋を用意しよう。

ちなみにSランク冒険者ならタダだ」

イオリは願ってもないその提案に驚いた。

「Sランクってそんなに優遇されるんですか？ 街に入るのも無料だったんですけど……？」

ヨルマは呆れたようにため息を吐いた。

「全く、コジモは何にも説明してないのか？ Sランク冒険者の称号は優遇されるだけの功績を上げた人間にしか与えられん。一国の軍と同じほどの戦闘力を持つとも言われている。そんなSランクにしか頼めない仕事もあるから、大事にされるんだ。まあ、お前さんはポーレット公爵家専属。公爵家を通してでしか依頼は来ないだろう。出来れば、アンティティラにいる間に、お前さんの意思で依頼の1つでもこなしてくれるとありがたい」

ヨルマがそう言ってイオリに頭を下げた。

「ギルマスが頭を下げないでください。俺達、アンティティラに用があつて来たんです。その合間で良ければ、依頼を受けようと思います」

「そうか。助かる。その用事に関して、何か力になれることはあるか？」

「宿を手配してくださっただけでも感謝してますが……そうですね、それじゃあ、アンティティラのグラトニー商会ってどこにありますか？」

「グラトニー商会？ この建物がある3番ロードの隣、4番ロードにあるが……？」

ヨルマは首を傾げた。

「ありがとうございます。ポーレットでグラトニー商会の皆さんにはお世話になってまして、アンティティラのグラトニー商会に寄れと言われていたんです」

「なるほど」とヨルマが納得したところで、デュークが戻ってきた。

「お話まとまりました？」

「ああ。ギルドの一番良い部屋を用意してやってくれ」

ヨルマの指示にデュークは頷いた。

「じゃあ、早速案内しましょう。皆さん、どうぞ」

イオリ達はヨルマに礼を言うと、デュークについていった。

デュークは歩きながらギルドの説明をする。

「このギルドは3階建てで、2階から上の階は基本宿になっています。アンティティラの冒険者ギルドは横長になってましてね。部屋数が多いんです。街を造り始めた頃は宿がなくて……ギルド内に冒険者の泊まる所を作った名残なんです。その時代はギルドが役場の役割を負っていたんですよ。今では、他に良い宿が出来ましたが、ギルドで宿泊する冒険者は多いんです。安いですしね。1階は食堂兼バーで、その他にも、治療室、ポーシヨンなど冒険者に必要な物を売っている売店、解体場なんかもありますね」

パティが解体場という単語を聞いてキラっとした笑みを浮かべた。

デュークが説明を続ける。

「で、説明したように、2階はギルマスの部屋と受付以外は宿になってます。イオリさん達の部屋は3階の奥です。シンプルですが広いので皆さん休めると思っています」
デュークはそう言うと、イオリ達を部屋へ案内した。

「さあ、どうぞ」

案内された部屋は確かにシンプルだが、イオリ達には十分な広さだった。

イオリはデュークに礼を言う。

「ありがとうございます。着替え次第、少し出てきます」

「出る時は一度、受付にお寄りください。鍵はこちらです。それと、食堂は使っても良いですし、外で食べても構いませんよ」

デュークはそう言って微笑^{ほほえ}むと、部屋を出ていった。

イオリが子ども達に呼びかける。

「さあ、着替えてグラトニー商会に行っちゃおう。そうしたら、食事をして今日は休もう」

「はい」

子ども達はいそいそと魔法の腰バッグから着替えを出す。

(希少な種族のソルをギルドで登録するまでは不安だったが、一旦は何とかなった……)

それでも、ソルの力を人前で使うのはやめようと思うイオリであった。

2

イオリ達が服を着替えて受付に行くと、依頼の受付とは別のカウンターがあって、そこには宿泊受付と書いてあった。

イオリはそこにいた職員に声をかける。

「街に出ようと思うんですけど」

「はい。イオリさんパーティーですね。鍵はお預かりします。お帰り次第、また声をかけてください」

長い耳をピョコピョコと動かして、ウサギの獣人であろう女性は笑顔でそう言った。

「分かりました。あのー。教会ってありますか？」

「教会ですか？ 1番ロードの入り口にありますよ。行けばすぐに分かります」

受付の女性にお礼を言うと、イオリ達は外に出た。

「ウサギの獣人さんだったね」

「うん！ アンティティラでも、獣人は笑ってたね」

「うん！ アンティティラでも、獣人は笑ってたね」

狼獣人である双子が、嬉しそうにそう話している。

イオリはその時になって初めて、ポレレット以外の街で、子ども達が不安を感じていたことに気づいた。

「この国ではどんな種族の人でも平等なんだろうね。悪い人もいるだろうけど、獣人さんが笑顔で生活してるのは2人にとって安心だね」

イオリの言葉に、双子は笑顔で頷く。

「うんー」

イオリ達は歩いて3番ロードの入り口——広場まで戻り、1番ロードの中に入る。

そこには教会があり、その前で何やら騒ぎが起きていた。

冒険者であろう男女5人が、地面に転がされている。

「何だっつてんだよ！俺達が何をしたんだよ!？」

地面を這う男性が声を上げた。

おそらく彼らを倒したのであるうドワーフの男性が怒鳴り返す。

「じゃあぁーしー！ここがどこか分かってんのか？神聖な教会で、裏取引なんかしてんじゃねー!! はっ倒すぞ！」

もう、はっ倒してないか？と思いつながら、イオリはしばらく怒るドワーフの男性と冒険者達を観察していた。

「う、うるせー！お前には関係ないだろーが!!」

「そうよ！それに、コイツらから言ってきたんだから私は悪くないわ！」

先ほどの男性に続いて、転がっている女性も文句を言う。

すると、ドワーフの男性は女性の頭を鷲掴みにし、引きずるように放り投げた。

「きゃー！ー！」

ドワーフの男性が口を開く。

「誰か、冒険者ギルドへ通報してくれ。違法な依頼取引してる連中がいるってな」

それを聞いた1人の見物人がギルドに走っていき、別の見物人が冒険者達を縛っていった。

ドワーフの男性は手をパンパンと打ち、汚れを払う。

その後、近くで様子を窺うイオリ達に気づいた。

「おう。教会に用か？」

「はい。リュオン様に旅の無事を報告させてもらえたらなって」

ドワーフの男はニッコリ笑うと頷いた。

「そうか！ ゆっくりしていけ！俺はアンティティラの教会で神父をしているダーグルだ。

あー……なんだ。怖がらせて悪かったよ」

イオリの後ろで怯える子ども達に申し訳なさそうな顔をしてダーグルは謝った。

イオリが口を開く。

「大丈夫ですよ。ポーレットから来ました、イオリです。冒険者をしています。こちらが従魔のゼン、アウラ、ソル。狼獣人の双子のスコルとパーティにエルフのナギです。今日、アンティティラに着いたんですよ。みんな、ご挨拶しよう」

子ども達はイオリの真似をして挨拶をした。

ダーグルはニツカリ笑うと、イオリ達を教会へ入れた。

「ポーレットってことは、エドバルドは元氣か？ 相変わらず、ニヤけた顔してんだらうな」

「はい。お元氣ですよ。お知り合いですか？」

「ああ。教会の神父になるには、王都の教会本部で研修を受ける必要があつてな。その時一緒だったんだ。良い奴だが、アイツの口車に乗せられて、何回用事を押しつけられたか……」

「はははは。俺達は優しいエドバルドさんしか知らないんで、意外です。ところでさっきの人達が生じた違法な依頼取引って何ですか？」

イオリの質問に、ダーグルは眉をひそめて答える。

「依頼を引き受けた者とは別の者が依頼を達成して報酬を得るっていう、言わばズルだ。女の名前で依頼を受け、男達が依頼を達成する。男達は金を稼ぎ、女はランクが上がるっていう寸法だ。まあ、ランク上げのために人に協力を仰ぐことは普通にあるが、あの女のやっつてることは丸投げだ。それは違法だ。大方、ランクを上げてどこぞの貴族の目に留まれば良いと思っただらう」

「なるほど……」

確かにそれは頂けない、とイオリは考えた。

そして、ダーグルはポーレットのエドバルドとは異なり、随分と荒々しい神父なようだ。

「ねー。神父さん。この教会は彫って造ったの？」

スコルがダーグルに話しかけた。

ダーグルは嬉しそうに説明をする。

「そうだぞ、坊主。アンティティラの街を建造した先人達が、無事を祈願して最初に造った建物がこの教会だ。街中の建物は基本的に、木材や石材、土などを利用してるが、教会だけは彫って造られた。かつこいいだろ」

「「うん！」」

子ども達の笑顔を見て、ダーグルは気分が良さそうに笑った。

「さあ、ここが祭壇だ。ゆっくりしていけ」

ダーグルは祭壇を指差すと、別の部屋に向かった。

イオリ達は祭壇の前でマツカ跪き、祈った。

「リュオン様、無事にアンティティラに着きました」

「お疲れ様でした。相沢さん」

リュオンの優しい声が響いた。

イオリが顔を上げると、そこは教会ではない場所だった。

「可愛らしい家族が増えましたね。相沢さん」

リュオンの言葉を聞き、イオリは肩にいるソルに目をやった。

「あれ？ アウラはこの場所まで来られないの？」

イオリの疑問にリュオンが答える。

「その子が聖獣だからでしょうね。おいで」

リュオンが手を出すと、ソルは羽を動かしてリュオンの元へ飛んでいった。

「まさか、相沢さんがフェニックスと契約するとは私も考えていませんでした。どうぞ大切に」

「はい」

「ゼンはまた、弟が出来て良かったですね。優しくするのですよ」

リュオンは続いて、イオリの近くに座るゼンに話しかけた。

『はい。ソル可愛い。大好きだよ』

ゼンの言葉を聞いて笑うリュオンに、イオリが願ひ出る。

「リュオン様にお願ひがあります」

珍しいイオリからの申し出に、リュオンが驚いた様子を見せる。

「どんなことでしょうか？」

「リュオン様に頂いたお金を使わせていただきたいのです」

話の内容を理解したリュオンは微笑んだ。

「以前忘れると言ったお金ですね？ 奴隷の兄妹の解放のために使うと？」

この世界に来る際にリュオンが腰バッグに入れた大金のことを、イオリは忘れると言ったのだ。

「はい。俺達は冒険者として十分に生活出来ています。だから、頂いたお金は彼ら兄妹のために使いたい。ただ、もらったお金ですので、許可を頂きたいんです」

「あなたに差し上げたお金です。あなたの自由に……。そんなわけにはいかないのですね？ 許し

ましょう。その使い方を許可します」

リュオンの言葉を聞き、イオリはホッとした顔になった。

しかしすぐに顔を曇らせる。

「思いもよらず、ソルレランテを家族に迎えることになりました。フェニックスは怪我を治して

くれると聞くので、彼にもその力を使つてあげたいと考えているのですが……。体を治すだけで彼ら

兄妹を助けられるのか不安です」

そんなイオリにリュオンは微笑む。

「相沢さん。所詮人間は、他人の人生を救うことなど出来ないのですよ？ 人生はその人、一人一

人のものです。あなたはあなたの出来ることをすれば良いのです」

リュオンの言葉で、イオリは自分の考えが間違っていたことに気づいた。

「ごめんなさい、リュオン様。思い違いをしました……。助けるのではない……。一緒に笑って生

きることが俺の出来ることでした。寄り添って、助け合って、共に生きようと思います」
リュオンはその言葉に頷く。

「それが結果的に彼らの心を救うかもしれません。時間がかかったとしても……。そして、忘れてはいけません。人生や命はその人自身のものです。さあ、お帰りなさい。また会えるのを楽しみにしています」

イオリは目を開けると、これから自分がすべきことを思い描いた。

「さあ、グラトニー商会に向かおうか」

そして、子ども達に声をかけると立ち上がった。

汚れた服を着替えてきたダーグルが声をかける。

「もういいのか？」

「はい。この街に少し滞在するんで、また来ます」

「そうか！ よし。また来い！」

やはり神父としては豪傑過ぎるダーグルに苦笑し、イオリ達は教会をあとにした。

「やっぱり、お髭が立派だったね」

ナギの真面目な言葉に、双子は「ブフー！」っと吹き出して口を開く。

「笑わせないで！」

イオリもニヤニヤしながら頷いた。

子ども達がコロコロ笑うのをすれ違う人達が微笑ましげに見ていた。

△ △ △

アンティティラの入り口の広場に戻り、イオリ達は今度は4番ロードに入った。

ここでも、職人の働く音が鳴り響いていた。

1番ロードよりも賑やかな4番ロードは、人の行き来が激しい。

イオリはナギを抱き上げ、双子に離れないように忠告する。

そして、グラトニー商会アンティティラ支部を目指した。

建物は4番ロードの中心地にあった。

ポーレットに比べると小さい建物だが、立地のせいか人の出入りは頻繁だ。

入り口に立つ2人のドアマンは、冒険者のような屈強な男性。

イオリが声をかけると話を聞いてくれた。

「すみません。ポーレットのグラトニー商会内のホワイトキャビン代表、バート・グラトニーさんの紹介で来たイオリと言います。こちらの代表にお会い出来ますか？」

2人の男性は顔を見合わせる。

そのあと、イオリだけでなく子ども達や従魔を見てから頷いた。

「今、代表の秘書に話を通す。中で待っていてください」

1人の男が中に入り、イオリ達にも入るように促した。

建物の中は随分とポーレットのものは違っていた。

ポーレットはホテルのフロントのようだが、アンティティラはカントリーバーのようだった。

部屋の端にある階段から男性が走り寄ってきて、イオリの前にやってきた。

「ようこそ、イオリ様。お待ちしておりました。私、支部長秘書を務めている、ミロと申します。

只今、支部長はお客様との会談中ですのでしばらくお待ちください」

「突然お伺いしたのはこちらですから、出直しますよ」

イオリの言葉を聞いたミロは必死に首を横に振った。

「いえいえ、すぐに終わると思いますのでお待ちください。イオリさんをお帰ししたことを知られ

たら、何をされ……」

ドンっ！ ゴロゴロゴロ！！

突然のことだった。

男が2人、階段から転がり落ちてきたのだ。

「さあ、お客様のお帰りだよ」

そう言い放ったのは、階段の上で腰に手を当てている、細身の女性だった。

カントリードレスに身を包んだその女性は、ブーツをコツコツと鳴らしながら階段を下りてくる。

その女性はミロを見つけるや否や、声を上げた。

「ミロ！ 言っただろ？ どうせロクでもない連中だって。そろそろ、人を見る目を育てろって言ってるだろ？ コイツら、サファイアと言いなながらガラス玉を持ってきやがった……。グラトニーを騙すなら一流品を持ってきな！ ミロ、どこで偽造しているか調べときな。絶対に許さないよ」

ミロは慌てて首をブンブン縦に振った。

「で？ その坊やが父さんが言ってた子かい？」

女性の言葉にミロはまたもやブンブンと首を縦に振った。

女性はイオリ達を一瞥すると手招きをした。

「ついで」

イオリがミロに顔を向けると、ミロは「さあ行け！」と言わんばかりに手を階段へ向けた。

随分と荒々しい人が多い街だな、と思いながらイオリは階段を上る。

そのまま進み、扉が開いている部屋に着いた。

部屋の中では先ほどの女性が頭を抱えている。

「すまなかったね。みっともないところ見せちゃって。最近、新しいダンジョン——天空のダンジョンが誕生したためか、偽造品を持ち込む輩が増えちゃって困っているんだ。イオリさんだった

ね。アンティティラまで無事に着いて何よりだよ。私はグラトニー商会アンティティラ支部長のアンナだよ。うちの父親の命を助けてくれて感謝するよ。ここでも何かあったら言いな。力になる」アンナは一通り話すと、イオリがキョトンとしているのに気づき首を傾げた。

「どうした？」

「あつ！ すみません。迫力に驚いちゃって。イオリです。初めまして。こちらが従魔のゼン、アウラ、ソル。狼獣人の双子のスコルとパティ。それとエルフのナギです。あの……アンナさんのお父さんってもしかして……？」

「あん？ アーベル・グラトニーだけど？ 聞いてなかったかい？」

イオリ達は驚いて改めてアンナを見た。

確かに似てなくはない……。

「アーベルさんに、綺麗な娘さんがいたんだね」

スコルの言葉にパティとナギが同意する。

「ねー」

「はははははは！ そうかい？ ありがたいね。小さい頃は父親に似て絶望していたけど、年を重ねると母親に似てきたんだよ。……ウチの父親は私のことを何にも説明しなかったんだね？ 私はアーベル・グラトニーの長女。現在、グラトニー商会の会頭を任されているのが私の弟だね。兄弟は他にもいるけど、私はアンティティラを拠点にしている職人と結婚したからここに来たんだよ。つ

いでにこの支部の代表をしてる」

支部長がついでとは立派なもんだなとイオリは思った。

イオリが気になったことを尋ねる。

「アンナさんの旦那さんは何の職人さんなんですか？」

「魔石の加工技師さね。魔石の原石を使いやすく加工したり、鑑定したり、装飾品に変えたりもしてるよ。その世界では有名さ。息子が2人いて、1人が技師になるための修業をして、もう1人はグラトニーの本店で修業中。娘も1人いるけど、アンティティラの職人に嫁に行ったよ」

アンナは自分の家族のことを楽しそうに話し、言葉を継ぐ。

「……私も昔はグラトニーの長女として、王都ではそのへんの貴族には負けないくらいお姫様扱いされていたさ。でも、ウチの人と出会ってこの街に来て仕事を始めたら、今までのお姫様ではいられなくなったんだよ。ここ、荒っぽい人が多いから」

アンナはそう言って、優しい顔で笑った。

イオリが口を開く。

「楽しそうだから、良いんじゃないですか？ 確かにここは荒っぽい人が多そうだけど、素直な街ですね。それで今日お伺いしたのは……」

アンナは分かっていると言うように、資料を差し出した。

「コリンズ兄妹のことだね？ 元はここじゃない奴隷商に売られてね。何店舗か経由してアンティ

ティラまで流れてきたんだ。その分、料金は嵩かさんでるよ。本当にグラトニーが手助けしなくて良いのかい？」

「はい。以前、分不相応のお金を譲り受けまして、使いどころに困っていました。俺達、冒険者として生活は出来ているんで、使う必要がなかったんですよ。お話を聞いた時、この時のためのお金なんじゃないかと思ひまして」

イオリの話にアンナは感心したように頷いた。

「あの父親が気に入るはずだよ。分かった。明日、私が一緒に行こう。交渉はアンタがするんだよ」

アンナとイオリは打ち合わせを続けていく。

話し合いが進むとミロが紅茶を持って現れた。

「遅くなってすみません。どうぞ」

ミロはイオリ達に紅茶を勧めながらアンナに資料を渡す。

「お話し中とは思いましたが、急ぎ必要かと思ひまして」

アンナは渡された資料に目を通し眉間にシワを寄せた。

「他の店にも偽物が持ち込まれたって？ 商業ギルドに掛け合つて各店に鑑定士を置かなきゃいけないね。ミロ、見繕みとろつておくれ」

アンナの言葉を聞くと、ミロは頭を下げて部屋を出ていった。

「話を遮さかつてすまないね。ダンジョンが出現すると問題が起きるんだ。特に、ダンジョンに入つてもない連中が騒さわぎを起こす。イオリも迷惑がかかったんだらう？」

宝石や魔石の詐欺は、それらを扱うアンティティラに持ち込まれてしまうようだ。

「はい。……宝石や魔石って、店によって金額が変わるんですか？」

「うーん。相場は決まっています、希少性が高いものは高騰こうとうするものもあるね。値崩れすれば、魔石を使う魔道具にも影響が出るから店同士で合わせてる感じだね。時折、いい加減な鑑定士を囲かこっている店もあるから絶対とは言えないけれど。まあ、直接貴族に持ち込んだりする場合は高く売れるが……。何が言いたいんだい？」

アンナはイオリの思案顔に気づくとそう尋ねた。

「いや、お店によって値段が違ふと思つていただけだけど一緒だったので……。冒険者ギルドに解体場があるように、商業ギルドが魔石と宝石に限り、鑑定場所を作つたら良いんじゃないかと。各店に偽造品が持ち込まれるより、一箇所に集めて各店に流す方が楽なんじゃないかと思ひまして。持ち込む方も本物だと思つていた場合もあるでしょ？ アンティティラの鑑定士に見てもらえば安心だつてことにしちゃえば良いんじゃないですか？ 鑑定士は、商業ギルドが試験をして許可した人だけがなれる制度にするとか」

イオリの何気ない言葉を聞いてアンナは啞然おぼだんとした。

「あんた……それを街の公共事業にするってかい？」

「まあ、この事態が収まるまでとか、期間を決めてもいいと思うんですよ。各商会、店には立派な鑑定士がいるでしょうし。ただ、ちゃんとした鑑定士がいらない小さなお店や職人さん達の心配は解消されるのではないかと思つて……。まあ、言ってみました。俺は細かいことは分からないんで、これで不都合が出てしまうこともあると思いますけど」

「ハハハと笑うイオリにアンナはため息を吐いた。」

「これかい。父さんが言っていたのは……。出来るか分からないが、ギルドや他の店にも話してみるか」

アンナは、初めて出会った青年になぜ父が入れ込むのかを理解した。

少ししてアンナが口を開く。

「それじゃ、明日は午前中に奴隷商へ行こう。9つの鐘が鳴ったらここへ来ておくれ」

アンナの言葉に双子が反応する。

「鐘？」

「ああ。この街は地下にあるから、いつが昼でいつが夜だ分からないだろう？ だから、鐘を鳴らして時を教えるのさ」

子ども達は嬉しそうに、鐘の音が楽しみだと口にする。

「その時間は、どのように決めてるんですか？」

イオリが質問をした。

「水だよ。この街の欠点は光が少ないだけじゃない。水も大問題なのさ。地上から滲み出る水は地盤を緩めるから危ない。けど、生活に水は必要さ。もちろん、現在は魔道具の街ならではの仕組みがあるが、先人達は街の中に水路を作つたのさ。山の脇にある川から大樽おおたるに一定量の水を流し、その大樽から水路へ流している。その大樽に水が溜まつた時に鐘を鳴らすんだ」

「なるほど、水でね……。面白いですね」

イオリは目を輝かせてそう言った。

アンナはイオリの反応を見ると面白そうに答えた。

「外へ出たら見てごらん。屋根を伝っている水路があるから。今では、その仕組みに魔道具を併用しているから、もっと便利になったよ」

改めて、9つの鐘が鳴ったら会いに来ると約束をして、イオリ達はグラトニー商会を出た。

子ども達と屋根を見上げれば、確かに水路らしきものが屋根の上を走っている。

山を掘り、地中に建物を建て、街を造る。

人が生活していく上で必要な設備の建設を人の手だけでやり遂げたのだ。

「人の力が凄いつて、こういう時に思うよな……」

イオリはそう呟きながら、子ども達と冒険者ギルドへ戻つていった。

冒険者ギルドに戻ると、イオリ達は食堂兼バーで食事をした。

初めての客であるイオリ達にウエイトレスやマスターは優しく、気持ちよく食べることが出来た。ベッドに入る時、イオリは子ども達に考えていたことを伝える。

「明日、家族になるかもしれない人には俺とゼンだけで会いに行くよ。大勢で行ったら、驚いちゃうかもしれないだろ。お店まで一緒に行くけど、今日会ったアンさんと待って欲しい」

人の心に敏感な子ども達は素直に頷いた。

「良い人だといね」

スコルがそう呟くと、パティとナギが緊張した顔で頷く。

「うん」

△ △ △

朝、イオリが目覚めると、すでにナギが起きていてゼンとアウラと話をしている。

ソルは、イオリが細い縄で編んだ籠に小さいクッションを置いて、その中で眠っていた。

双子も大人しく寝ている。

イオリが口を開く。

「おはよう。目が覚めちゃったか？」

コクンと頷くナギは、モジモジしながらイオリに尋ねる。

「今日、会う人が怖い人だったらどうしよう」

イオリは不安そうなナギを抱きしめた。

「そうだったら、俺達が殴ってやるさ。でも、少し心が疲れてるとは思うんだ。女の子もどんな状

態だろう……」

「ボクもそうなってたかもしれない……」

ナギは己の身に起こったことを思い出してそう言った。

「かもしれないはなしだ。これから起こることを考えよう。俺達がこうしていることだって、あの時は誰も分からなかった。だから、未来は怖いけど、楽しいこともあるんだ。ほら見て。双子が安心して寝てる。双子にはこれから何が起こるかな?」

イオリはナギを抱き上げ、双子の間に優しく放り投げた。

驚いた双子が飛び起きると、イオリ、ゼン、アウラも飛びつく。

そして子ども達をくすぐった。

キャハハハハハハ!!

「楽しくなりそうな方を選べよ、ナギ。怖いことを思い出すだけじゃなくて。迷ったら楽しくなりそうな方を選べ」

子ども達の笑い声がベッドを埋め尽くすと、ナギはイオリと目を合わせて笑いながら頷いた。

迷ったら楽しくなりそうな方を選ぶ……。
ナギの心にまた1つ優しい言葉が刻み込まれた。

「お出かけですかー？」

イオリ達が部屋を出て受付に行くと、昨日とは違ったポツチャリとした男性が座っていた。

「はい。お願いします」

イオリが鍵を差し出すと、男性は鍵を受け取りニッコリと笑う。

「朝食なら、ギルドを出て左手に少し歩くとある、大きなスプーンが目印の『ハラペコ』っていうお店がいいですよ。麦粥むぎかゆが有名なんですよ」

「ありがとうございます。早速、行ってみます。麦粥だって！」

ポツチャリした男性に手を振りギルドを出ると、イオリ達は大きなスプーンを探した。
昨日に比べると人通りはまだ少ない。

「あった！ 大きいスプーン！」

パティが指差す店にはドアほどの大きさのスプーンが立てかけてあった。

イオリ達が店まで行き扉を押すと、中は朝食を求めてやってきた人で賑わっていた。

「いらっしやい！ 空いてる席に座ってね！」

そう言ったドワーフの女性店員は、フロアを動き回っている。

「ここ空くぞ！」

ドワーフ冒険者達が手を挙げて席を譲ってくれる。

「ありがとうございます」

イオリに続き子ども達もお礼を言うと、男達はニカッと笑い、食べ終わった皿をカウンターに返して店をあとにした。

イオリ達が着席すると、先ほどのドワーフの女性が大きなお腹を揺らしてやってきた。

「はいはいはい。ご注文は何にする？」

「麦粥が有名って聞いたんですけど……」

「お客さん、アンティイラは初めてかい？ 麦粥はここいらじゃ、朝の定番なんだよ。ウチのも人気だよ。甘いのとしょっぱいの、どっちがいい？」

「『甘いのー！』」

子ども達が一斉にそう言った。

「ハハハ！ そうだね。子どもは甘いのが良いね。お前さんはしょっぱいのにしとくかい？」

そう尋ねられ、イオリは頷く。

「はい。お願いします。従魔にも甘いのをお願いします」

「あいよっ！」と返事をする、女性は調理場に顔を突っ込みオーダーをした。

砂糖は希少なのに、甘いものがあるとはどういうことなのだろうか？ とイオリは首を捻った。数分待つとホカホカの皿が運ばれてくる。

甘いものを選んだ子ども達の皿には、麦粥の上にドライフルーツとナッツがトッピングされていて、しょっぱいものを頼んだイオリの皿には柔らかく煮た干し肉が入っていた。

「さあ、食べとくれ。従魔のはここに置くよ」

「いただきます」

「いただきます！」

そう言うと、イオリ達は食事を始める。

麦粥はほんのり甘く、トッピングがマッチしている。

「うん！ おいしい！」

子ども達の声にドワーフの女性はニッコリ微笑んだ。

「良かった！ 慌ただしい店だけど、ゆっくりお食べ！」

（これ……。麦を牛乳で煮たらもつと美味くなりそうだな）

イオリは1人、ポーレットへの土産について考えていた。

食事を終えたイオリ達は、一旦宿に戻り、疲れていて出来なかったダンジョンの報酬の整理をすることにした。



狩った魔獣の素材のうち、基本イオリ達が求めるのは食べられる肉。高価な部位だけは一応ストックして、あとは売ることにした。

そして、ワイバーンの階層で手に入れた宝石。

イオリが鑑定して、それを子ども達が仕分けていく。

「サファイア、ガーネット、ブルーダイヤ……サファイア……。何個あるんだよ！」

「『イオリ、頑張れ！』」

大小様々だが、大量の宝石に嫌気が差してきたイオリ。

そんな中、荒削りの原石がゴロゴロと姿を現した。

「ふー。これらは？」

鑑定すると、ただの宝石とは違うようだ。

ピンククオーツ… 魔石化した宝石。守護の力を持つ。

イエロークオーツ… 魔石化した宝石。守護の力を持つ。

グリーンガーネット… 魔石化した宝石。身体強化の力を持つ。

レッドスピネル… 魔石化した宝石。身体強化の力を持つ。

アクアマリン… 魔石化した宝石。身体強化の力を持つ。

ブラックダイヤ… 魔石化した宝石。身体強化の力を持つ。

「割と内容が偏ってるな……。うん。これはみんな使おう。他には、オルガ夫人へのお土産を選んで……。何個かストックして、残りはお金に変えちゃおう。アンナさんに相談すれば大丈夫だと思うけど……」

仕分けを終えたイオリ達がギルドの受付に行くと、デュークがニッコリ笑いながら顔を出す。

「どうしました？」

「ダンジョンで狩った魔獣を売りたいんですけど、良いですか？」

「!! もちろんです！ こちらで売っていただけで光栄です。是非ともお願いします！ 欲しい部位がございましたら、解体職人に相談してください。ご案内しましょう」

デュークは頬が緩むのを隠そうとせずにイオリ達を解体場に案内する。

「オインさん！ オインさん！ 例の！ ダンジョン攻略者が解体を依頼してくれましたよ！」

デュークがそう言うと、解体場が一気に騒然とする。

「あのーこれは？」

イオリの質問にデュークが答える。

「ダンジョンの魔獣は通常より遥かに高く売れるんです。もちろん買取もはずみですよ。それに攻略者が持ち込んだとなると余計にです。あー、もう。オインさん！ どこですか？」

「ここだよ！ うるせーな、お前は……。おう！ 大将！ ここで解体させてくれるなんて感謝する。早速だ。見せてくれ」

デュークを後ろから小突き現れたのは、小柄なドワーフの男性だった。デュークが驚いた様子で話しかける。

「ああ、何で後ろから来るんですか!？」

オインは鼻をフンっ！ と鳴らし、デュークを下から睨みつけた。

「うるせーな、休憩中だったんだよ！ こっちは四六時中、解体してんだ。休みくらいとるだろーが！」

2人のやりとりを見ながらイオリは考え込む。

(ポーレットの冒険者ギルドへのお土産はダンジョンの魔獣がいいかな?)

ここで全てを売らない方がいいと考えつつ、イオリはダンジョンの下層で出会った魔獣達の素材を魔法の腰バッグから出していく。

「すみません。ポーレットにも持ち帰りたいんでこれをお願いします。あとワイバーンも1頭出しますね」

「[[「おおおおー」]]」

全部を出したわけではないが、デューク達は喜んだ。

素材を見たオインが口を開く。

「いや、十分だ！ ありがたい。早速、取りかかろう。数があるから数日もらえるかい？」

「はい。何日か滞在しますんで時間は大丈夫です。ギルドの宿舎でお世話になってるので、いつでも声をかけてください」

そこで、イオリは袖をツンツンするパティに気づき振り向いた。

パティがイオリの目を見てお願いをする。

「パティここにいってもいい？」

その言葉を聞いて、イオリはオインにお願いをする。

「この子、解体に興味があつて修業中なんです。練習させてもらえませんか？」

すみれ色の髪のが愛らしい女の子が頭を下げるのを、デュークをはじめ、オインや解体作業をしている職人達は驚いた様子で見る。

オインはパティの真剣な顔を見て頷くと、声をかけた。

「邪魔はすんなよ？ 危ねーからな。分からないことは、こっら辺の奴らが教えてくれる。アンティティラは職人の街。技術を学びたい奴には教えてやるのが信条よ」

パティはニッコリ笑うとスコルに抱きついた。

「よろしくお願いします」

パティが頭を下げてお礼をした。

「ゴーン！ ゴーン！ ゴーン！」

鐘の音が鳴ったのはその時だった。
子ども達は一生懸命に数を数え始めた。

3

「……6つ……7つ……8つ……9つ!!」

「ゴーン！ ゴーン！ と鐘が9つ鳴った。

数えていた子ども達は大はしゃぎをする。

「何か予定があるんですか？」

子ども達の反応にデュークは笑いながら首を傾げた。

イオリが訳を説明する。

「ええ、約束がありまして、鐘が9つ鳴ったらというお話だったんです。なので行ってきました。オ

インさん、パティをよろしくお願いします」

イオリの言葉にオインが頷く。

パティは元氣よく手を振ると笑顔でオインについていった。

イオリ達がギルドをあとにしようとして歩いていると、デュークが声をかける。

「あんなに可愛らしいのに、なぜ解体なんか好きなんです？」

悲しそうに尋ねるデュークに、スコルが胸を張って答えた。

「パティが解体をして、その素材を使ってボクが料理をするって目標があるんだ。パティが頑張ってるからボクも頑張る！」

「普通、逆じゃありません？」

スコルの話を聞いて、デュークはイオリに問いかけた。

「まあ、好きなことをしなさいって教えてるんでね、我が家は。双子が選んだことには何も言いませんよ。スコルも良くやっているよ」

イオリに褒められ喜ぶスコルは、ナギの手を取ってギルドの扉を開いた。

「……行つてらっしゃいませ」

デュークの声に見送られ、イオリ達はひとまず、グラトニー商会へ向かうことにした。



「ああ、来たね。おはよう。お姫さんはどうした？」

イオリ達がグラトニー商会の中に入ると、アンナは今日も堂々と階段を下りてきた。

「パティはギルドで魔獣の解体の練習！」

スコルがにこやかに言うと、アンナは驚いた顔でイオリを見た。

「俺がやってるのを見て興味持っちゃって」

頬を掻きながら顔を赤くするイオリを見て、アンナは大笑いした。

「ハハハハハ！ そうかい！ 女だつて解体出来るさ。エルフの女達も見事な解体をするよ。今度、会ったら聞くといい。男と女の体の使い方は違うからね。勉強になるだろう」

イオリが口を開く。

「それはいい話を聞きました。そうします。まだ小さい体なんで心配してたんです」

アンナはエルフと聞いて興味を示したナギの頭を撫でた。

「アンタの仲間は沢山いるよ。戦えない連中だつて逞しく生きてるさ。私には、アンタみたいに戦いに向いてなくても、高ランク冒険者をしてる知り合いもいる。要は自分の力を信じるのが大切なんだ」

ナギは嬉しそうに頷いて、スコルとイオリを見上げた。

そこでアンナが声をかける。

「さあ！ 早速、奴隷商に行こうか。同じ4番ロードだ。近くだよ」

歩き始めたアンナと共に歩いてきたのは、屈強な男性2人だった。

用心棒だと紹介された男達はイオリ達に挨拶をすると、アンナを囲むように陣取る。

道を歩けば挨拶をされるアンナを見て、やはりグラトニー一族のだとイオリは感じた。

たどり着いた奴隷商はシンプルな造りで、看板すらかかっていなかった。

「まあ、奴隷で暴力をむさぼる奴は嫌われるってね」

イオリの表情を見たアンナがそう説明をする。

そして、木の大きな扉を開けると声をかけた。

「ステイルさん。いるかい？」

アンナの声に反応して出てきたのは白髪混じりの紳士だった。

「いらつしやいませ。グラトニーの支部長様。人手がご入用で？」

お似合いのスーツを着こなし、首元には紐状のネクタイをした紳士——ステイルは、イオリを見て「おやつ？」という顔をした。

「この前、伝えたお客さんだよ。奴隷をご所望だね。例の彼と会わせてもらえるかい？」

アンナの説明に続いて、イオリは腰バッグからアーベル・グラトニーにもらった紹介状を差し出した。

ステイルは紹介状を受け取り、内容を確認するとニッコリ微笑んだ。

「奴隷商、ホープ」へようこそ、お客様。私は店主のステイルと申します。お客様のお求めの材料は決意の男ヒューゴ・コリンズ、お1人ですね？」

「いいえ」

ステイールに尋ねられたイオリは首を横に振った。
ステイールが不思議そうにする。
アンナも腑に落ちない顔をした。

「俺達が求めているのはヒューゴ・コリンズとニナ・コリンズの2人です」
イオリの言葉を聞いたステイールは、満面の笑みを浮かべて扉を開けた。
「お客様には自信を持ってご紹介させていただきます。どうぞ、こちらへ」

イオリ達は応接室のような場所へと案内される。

「それではイオリ様。奴隷の売買に関するお話をさせていただきます。奴隷は、人材派遣とお考えください。必要な方にご紹介し、奴隷側も納得しましたら契約成立でございます」

イオリは革張りのソファアに座ってもてなしを受けながら、ステイールの話を聞いていた。

「奴隷さん達の納得というのは、雇用形態についてでしょうか？」

「それもございますが、自分が安心して働けるか、信用に値するかを奴隷自身が選ぶのです」

イオリの疑問に明瞭に答えたステイールは、今度は質問をする。

「どのような理由で、コリンズ兄妹をお求めなのでしょう？」

イオリは自分達の生き方、ヒューゴ・コリンズとニナ・コリンズを求める理由を簡単に話した。
そして、そのまま質問をする。

「現在、コリンズ兄妹はどのような生活をしてるんですか？」

「兄のヒューゴは朝の鍛錬を欠かしません。ニナは、少しでもお役に立てるように掃除用の生活魔法を仕込んでいます」

イオリはニナが魔法を使うと聞いて驚いた。

「確か、3歳でしたね？ 凄くないですか？ それでも買い手が付かなかったと？」

「もう少しで4歳になります。兄のコリンズが認めなかったこともありませんが、ニナには問題があります。実は……声が出せないのです」

「声……」

その話を聞かされイオリは戸惑った。

「医者にも回復師にも見せたのですが、心的原因ではないかと言われています」

「可哀想に、辛い思いをしたんだね……」

子どもを持つアンナも顔をしかめる。

そこでイオリはあることに気がついた。

「……？ あれ？ それって凄くないですか？」

何が？ という顔をする面々にイオリは説明をする。

「俺はポーレット公爵と懇意にさせてもらってます。俺は魔法を使わないから確かじゃないですけど、公爵家の使用人さん達が掃除に魔法を使う時、詠唱してましたよ？ 声が出ないなら無詠唱っ